

## 【フォーラム】

チベット・ビルマ系言語から見た「緊喉母音」の  
多義性とその実態

鈴木 博 之

プロヴァンス大学／CNRS／日本学術振興会

**【要旨】** チベット・ビルマ系 (TB) 言語の複数の言語には、その母音組織に「緊喉／非緊喉」の対立が認められる。しかしながら、「緊喉」という用語は調音音声学的に多義であり、その多義の全容が明らかにされていない点に起因する問題が起きている。本稿では、先行研究において「緊喉」と呼ばれた音声現象をもつナシ語及びムニャ語について当該音声の音声記述を行い、「軟口蓋化」「そり舌化」「咽頭化」の3つの二次的調音を「緊喉」の多義の一部として認める。分析の過程において、これら3つの音声現象が文献によって「r化」という用語で扱われていることも明らかにし、TB言語に見られた記述言語学上の混乱は調音音声学の面で酷似する現象に与えられた「緊喉」「r化」という用語の濫用によることから、調音音声学的な用語による記述の必要性を主張する\*。

**キーワード：**チベット・ビルマ系言語、緊喉、咽頭化、そり舌化、軟口蓋化

## 1. はじめに

チベット・ビルマ系言語（以下「TB言語」）には「緊喉母音」と「非緊喉母音」の音韻対立をもつ言語が複数存在する。先行研究や扱われる言語により、その緊喉性が母音組織において対立を認めるか、もしくは超分節音素（多くは声調）において対立を認めるか、それぞれの立場に違いはあるものの、この種の対立を有するTB言語の記述において重要な現象であることに変わりはない。

「緊喉」という用語と概念は中国の言語学で初めて用いられ、TB言語の記述において最も早く「緊喉母音」という用語を用いたのは馬學良 (1948: 579) である。以降、TB言語以外にも中国の言語学では用いられるほか、日本においてもTB言

\* 本稿は第19回チベット＝ビルマ言語学研究会 (2009年12月) において発表した内容の一部を改稿したものである。本稿の議論は現地調査において多くの協力者の方々から教えていただいた資料に基づいている。また、査読者の方々には重要な指摘を多くいただいた。ここに記して感謝の意を表する。なお、筆者による現地調査については、次の援助を受けている：平成16–20年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (S) 「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号16102001)、平成19–21年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費) 「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」、平成21–22年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A) 「ギャロン系諸言語の緊急国際共同調査研究」(研究代表者：長野泰彦、課題番号21251007)。

語の記述を中心に用いられている。しかしながら、TB 言語において「緊喉母音」は音韻論的には重要な現象である一方、その音声学的特質は一般に知られていない。その中で、馬學良 (1948: 579) は「緊喉」の音声実現が「発音時に喉頭がやや緊縮する (laryngeal constriction)」と記述し、戴慶廈 (1958: 36) は緊喉母音を「声帯を緊張させ縮める音」と定義し、「時によって喉頭と声帯が緊張し縮まるだけでなく、咽頭や口腔内の筋肉も同時に引き締まる」とある。一方で亀井 他 (編) (1996: 304) の「緊喉母音」の項目によると、「緊喉母音の音声学的な内容は必ずしも明らかではない」とした上で、その英訳に creaky vowel を当てている。

「緊喉」を仮に「creaky = きしみ音 = 喉頭部の披裂軟骨をきつく閉じて発せられる音」と理解して、実際に複数の TB 言語の音声に触れてみると、確かにきしみ音で実現されるものもきしみ音を全く伴わないものも共に緊喉母音と呼ばれていることが分かる。そして、1つの言語において「緊喉」と呼ばれている現象の示す音声学的特徴は安定している。つまり、「緊喉」とは「音声学的特徴が明らかでない」のではなく、「音声学的には1種類に定まらない数種の実現を含む現象の総称」といえる。

中国の言語学で用いられる「緊喉」の多義性を初めて包括的に取り扱ったのは朱曉農 (2006: 18-20)<sup>1</sup>である。しかしながら、TB 言語の中で「緊喉」と呼ばれてきた現象について、同論文が指摘していない音声現象の存在が筆者の現地調査によって分かった。「緊喉」はもはや音声学的な側面において術語として機能していないため、正確にその調音音声学的特徴を記述し、関連する音声現象を含めよく定義された術語で整理しなければならない<sup>2</sup>。

## 2. 「緊喉」の多義

### 2.1. 朱曉農の指摘

「緊喉」の多義性を扱う朱曉農 (2006: 18-20) が提示する「緊喉」の音声学的特徴は以下の16種類に達する<sup>3</sup>。

#### 1. 声門閉鎖

- (a) 音節末声門閉鎖
  - i. 短音節の末尾
  - ii. 長音節の末尾
- (b) 音節間声門閉鎖

<sup>1</sup>ただしこれのもととなった会議発表論文 (朱曉農 2003) がある (筆者未見)。

<sup>2</sup>この問題意識は朱曉農 (2006) や朱曉農・周學文 (2008) などとも共有されるものである。一方、朱曉農 (2008a: 303) では、音韻表記の簡潔性に触れながらも、歴史言語学的研究や類型論的研究は音声実現の詳細な記述なくして成立しないという旨の主張がなされている。

<sup>3</sup>この中には「弛緩」も含まれる。なお、朱曉農 (2006: 18-20) は「緊喉」を発声類型の中に位置づけ、「緊喉」が各言語の記述においてどのように音韻処理されているか (分節音が声調か) は問題にしていない。なお、朱曉農 (2008b: 115) には「緊喉」と相当する英語の術語との関連が図示してあり、有用である。

- (c) 音節初頭声門閉鎖
  - i. 共鳴音に先行する声門閉鎖
  - ii. 無声閉鎖音に先行する声門閉鎖
- 2. 前鼻音
- 3. 入破音
- 4. きしみ音
- 5. 放出音
- 6. 調音器官の緊張を伴う音
  - (a) 緊張子音 (fortis/lenis の fortis)
  - (b) 緊張母音 (tense/lax の tense)
  - (c) 緊張音節
- 7. 裏声
- 8. 弛緩
  - (a) ささやき音
  - (b) 有声有気音
  - (c) うなり音

このことは漢語で書かれた言語学論文における「緊喉」が意味する音声現象として理解されなければならない。また、朱曉農 (2010: 69–108) は以上の内容に関する音響音声学的分析を示しつつ、さらに詳細な記述を行っている。

## 2.2. 朱曉農の指摘から見た TB 言語における「緊喉母音」の概観

本稿では、「緊喉母音」を扱うため、明らかに母音と関わりのない子音的調音の「前鼻音」「入破音」「放出音」及び「緊喉」と対立する発声方法である「弛緩」は以降特に扱わない。

まず、先行研究において「緊喉母音」もしくは「緊喉」と記述される現象をもつ言語について、筆者が実際に音声現象を観察できたものを以下に言語別に簡潔にまとめる。具体例は一律省略する。

### ヒャルチベット語<sup>4</sup>

「緊喉」という語を用いている先行研究には鈴木 (2005, 2007, 2008ab) などがある。これらで「緊喉」は音声学的な現象を指し、音韻論的には「緊張レジスター」における音声実現の1つに数えられる。具体的な調音を述べたものには Suzuki (2008) などがある。筆者の観察では、方言により音声実現が若干異なるが、「きしみ音」や音節全体で調音器官の緊張を伴う「緊張音節」で実現される点で共通である。

また、「音節末声門閉鎖」も存在するが、それは「緊張レジスター」とは独立の現象である。

<sup>4</sup> 中国四川省北部で用いられる。

リス語<sup>5</sup>

「緊元音」(「緊喉母音」を指す)という語を用いている先行研究には徐琳等(1986)などがある。この記述では、「緊喉」は声調における一種の音声実現として処理されている。一方「緊喉」という用語は用いていないが音声現象を記述するものに、Yu(2007: 28, 38, 50, 56, 63)があり、その記述を参考にすると、この言語における「緊喉」は「短音節末声門閉鎖」と「きしみ音」が共起することもあると考えられる。筆者の観察(康普方言、攀天閣方言)でも同様に、「短音節末声門閉鎖」と「きしみ音」が音声学的に顕著である。

ジンポー語<sup>6</sup>

「緊喉母音」という語を用いている先行研究には劉璐(2009: 125-126)がある。この記述では、「緊喉」は母音体系の中の「緊喉母音」として処理されている。筆者の観察(バモ方言)では、「きしみ音」「緊張子音」および「緊張母音」で実現されるが、初頭子音が無声無気閉鎖音の場合、さらに朱曉農(2006: 18-20)には言及されない子音的調音が見られ、それは「前きしみ音化気音」と呼ばれるべきものである。前きしみ音化気音とはいわゆる初頭子音で主たる子音に先行する前気音の部分が声門の十分な収縮を伴って実現される現象を指す。

また、「裏声」も特定の語に現れるが、それは「緊喉母音」とは独立の現象である<sup>7</sup>。

ラチェイツ語<sup>8</sup>

「緊喉母音」という語を用いている先行研究には戴慶廈・李潔(2007: 9-15)がある。この記述では、「緊喉」は母音体系の中の「緊喉母音」として処理されている。筆者の観察(チャプイ方言)では、「きしみ音」および「緊張母音」で実現されるが、初頭子音が無声無気閉鎖音の場合、ジンポー語と同様に「前きしみ音化気音」が生じる。

ノス・ロ口語<sup>9</sup>

「緊喉母音」という語を用いている先行研究には朱文旭(2001: 121-125)などがある。この記述では、「緊喉」は母音体系の中の「緊喉母音」として処理されている。具体的な調音を分析したものに、Dantsuji(1982)、艾傑瑞等(2000)、Iwasa(2006)などがある。筆者の観察(九龍方言)では、ほぼ「きしみ音」で実現される。

<sup>5</sup> 中国雲南省、ミャンマー、タイなどで用いられる。

<sup>6</sup> 中国雲南省、ミャンマーなどで用いられる。カチン語と呼ばれることもある。

<sup>7</sup> 裏声の分布はごく少数だが、裏声でない例と弁別的である可能性もある。

<sup>8</sup> 中国雲南省、ミャンマーなどで用いられる。ラシ語、ラチツ語などとも表記される。

<sup>9</sup> 中国四川省、雲南省、などで用いられる。涼山彝語、彝語北部方言などとも呼ばれる。

## ムニャ語<sup>10</sup>

「緊喉母音」という語を用いている先行研究には孫宏開（1983）、黄布凡（1991）などがある。これらの記述では、「緊喉」は母音体系の中の「緊喉母音」として処理されている。筆者の観察（朋布西方言）によれば、朱曉農（2006: 18–20）の指摘の中では「きしみ音」で実現される例は数例にとどまり、先行研究の「緊喉母音」に対応する例には、同論文に言及されない「咽頭化母音」が大部分を占める。

上記のように、言語により朱曉農（2006: 18–20）の指摘する音声実現の中で「緊喉」に数えられる現象とそうでない現象が見られる事例も存在する。しかしさらに大きな問題としては、ムニャ語のように、同論文において言及されない音声実現が実際に「緊喉」と呼ばれている事実がある。他の先行研究を踏まえると、「緊喉母音」と呼ばれる音声現象には、さらに「軟口蓋化母音」「そり舌化母音」「咽頭化母音」が認められる。これらについて、3者すべてと「緊喉母音」の関係はナシ語について黒澤（2001）が記述している。次に、咽頭化母音と「緊喉母音」の関係は阿細口口語と阿扎口口語について Iwasa（2003: 16, 131, 200–201）の記述がある<sup>11</sup>。

以上の「軟口蓋化母音」「そり舌化母音」「咽頭化母音」について、次節においてナシ語およびムニャ語の具体例を筆者の調査に基づいて詳しく記述する<sup>12</sup>。

### 3. ナシ語とムニャ語の「緊喉母音」：音声記述と分析

本節では、先に提示した「軟口蓋化母音」「そり舌化母音」「咽頭化母音」のいずれかの音声「緊喉母音」として扱われたことのあるナシ語とムニャ語について、具体的な音声記述を行う。そして、先行研究の記述における問題点を批判的に検討する。

#### 3.1. ナシ語：咽頭化・軟口蓋化・そり舌化

ナシ語ではかつて「緊喉母音」が記述されたことがあり（楊煥典 1984）、その存在をめぐって展開された論争を黒澤（2001）が整理している。

その一方、黒澤（2001）の整理したナシ語に関する議論には、もう1つ別の問題が含まれている。ナシ語白地方言において「咽頭化に近い母音」とされるものは、ナシ語麗江壩方言の「軟口蓋化の音色を帯びた母音」に対応するけれども、黒澤

<sup>10</sup> 中国四川省で用いられる。

<sup>11</sup> 咽頭化については、戴慶廈（1958: 36）のいう「緊喉」にも咽頭の筋肉が収縮するという現象を認めている。しかしその記述では、咽頭化は声帯を緊張させ縮める調音動作に付随的に現れる音声特徴であるとみなされている。また、朱曉農（2010: 250）では、咽頭化が緊張母音とも呼ばれると指摘しているが、逆に「緊喉」の解説における「緊張母音」について咽頭化の説明はない。

<sup>12</sup> 中国の言語学論文では「緊喉」を一般に母音の下の“\_”で表示する。本稿では、筆者の調査に基づいて記述する部分については、IPAを参照しつつ必要に応じて朱曉農（2010: 18）に示されるシナ・チベット語族の言語記述に必要とされる音標文字を用い、精密表記を原則とするが、母音の舌位置を表す補助記号は、特に必要とされる場合を除き、付加しない。

(2001)も中国の先行研究<sup>13</sup>も、皆それを「r化音」と呼んでいる点である。このような用語の問題を含んでいるため、筆者自身で複数の方言について実際に音声記述を行い、言語事実を整理してみる必要がある。

上述の通り、ナシ語で「緊喉」が関わってくる要素は、先行研究では「r化音」と記述され、/ə/のみに現れる<sup>14</sup>。ところが筆者の調査したナシ語方言には、そり舌性の調音を伴う音声は確認できなかった。以下に問題となる例を掲げる<sup>15</sup>。

方言 出典	大研 楊煥典	大研 黒澤	大研 筆者	青龍 和・姜	啓別 筆者	白地 黒澤	東壩 筆者
肝臓	s <sub>l</sub> <sup>55</sup>	sə <sub>l</sub> <sup>55</sup>	sə <sup>55</sup>	sər <sup>55</sup>	sə <sup>55</sup>	s <sub>l</sub> <sup>55</sup>	sə <sup>55</sup>
肺	tʂ <sub>l</sub> <sup>h 55</sup>	tʂ <sub>ə</sub> <sup>h 55</sup>	tʂ <sub>ə</sub> <sup>h 55</sup>	tʂ <sub>ər</sub> <sup>h 55</sup>	tʂ <sub>ə</sub> <sup>h 55</sup>	tʂ <sub>l</sub> <sup>h 55</sup>	tʂ <sub>ə</sub> <sup>h 55</sup>
熱い	—	ts <sub>ə</sub> <sup>h 33</sup>	ts <sub>ə</sub> <sup>h 33</sup>	ts <sub>ər</sub> <sup>h 33</sup>	ts <sub>ə</sub> <sup>h 33</sup>	ts <sub>l</sub> <sup>h 33</sup>	ts <sub>ə</sub> <sup>h 33</sup>
白い	p <sup>h 21</sup> ər <sup>21</sup>	p <sup>h 11</sup> ər <sup>11</sup>	p <sup>h 21</sup> ər <sup>21</sup>	p <sup>h 31</sup> ər <sup>31</sup>	p <sup>h 21</sup> ər <sup>21</sup>	—	p <sup>h 11</sup> ər <sup>11</sup>
書く	—	pə <sup>v 55</sup>	pə <sup>v 55</sup>	pər <sup>v 55</sup>	pə <sup>v 55</sup>	—	pə <sup>v 55</sup>

筆者が確認したのは、軟口蓋化母音と咽頭化母音である。軟口蓋化 (<sup>v</sup>で表す)とは母音の調音開始とほぼ同時に後部舌背を軟口蓋に接近させるという二次的調音によって実現される音声を指し、咽頭化 (<sup>h</sup>で表す)とは母音の調音開始とほぼ同時に舌根を咽頭壁に接近させるという二次的調音によって実現される音声を指す。いずれも舌尖は下を向いていて、そり舌の特徴はまったく確認されないし、喉頭や声帯の緊張も伴わない。

「緊喉母音」を認める楊煥典(1984, 1991)では、「緊喉母音」は /ɿ, ʮ, ʮ/のみに現れ<sup>16</sup>、楊煥典(1991: 58)の解説から考えるとこの3者は互いに初頭子音について相補分布しており、記述される具体例を見る限り /ər/とも初頭子音について相補分布を見せている。筆者の調査では、黒澤(2001)の指摘同様、初頭子音によって若干音声学的な母音の舌位置の変化が認められるが、初頭子音の異なりによる主たる母音の調音に関わる舌位置への影響は少ない<sup>17</sup>。

また、楊煥典(1984: 133)によると、/ər/の調音については、「ナシ語のərは舌尖が下を向き、舌面中部が盛り上がる」と解説する。これは軟口蓋化の説明であるといえ、それをrの表記で表していることになる。同様により音声学的な記述を行っている黒澤(2001)でも、軟口蓋化や咽頭化の音色を伴うと述べているけれども、

<sup>13</sup> 楊煥典(1984)が「緊喉母音」と呼ぶものを除く。

<sup>14</sup> ただし黒澤(2009: 71)は /u/の異音に [ɸ] を記述しているが、これは単に [ʮ] を意味している。

<sup>15</sup> 楊煥典(1984, 1991)、黒澤(2001, 2009)、和即仁・姜竹儀(1985)の記載および筆者の調査に基づく。ただし表記を一部改め、声調は数字による5段階表示に統一する。なお、大研方言(麗江市古城)は大研方言群に、青龍(地点不詳)及び啓別方言(維西県塔城郷)は麗江壩方言群に、白地及び東壩方言(ともに香格里拉県三壩郷)は白地方言群に属する。

<sup>16</sup> 楊煥典(1984)には /ɿ/ が記述されていないが、楊煥典(1991)で追加された。

<sup>17</sup> なお、筆者の調査した部分について、東壩方言の /ə<sup>v</sup>/ は [ə<sup>v</sup>/ɿ<sup>v</sup>] で実現されることが多く、それ以外の方言の /ə<sup>v</sup>/ は [ə<sup>v</sup>/ʮ<sup>v</sup>] で実現されることが多い。

その音声表記は一貫して [ɹ] を用いている<sup>18</sup>。このことから言えるのは、「軟口蓋化」という調音が「r化」という用語のもとに記述されているということ<sup>19</sup>であり、その上で楊煥典（1984）が「緊喉母音」と記述しているものも「軟口蓋化」が大きく関わっているということである。

二次的調音がそり舌で行われる変種を筆者は確認していないが、一部の村の発音では存在するらしい<sup>20</sup>。そしてそり舌化母音を伴う例は、先行研究の記述にある /ər/ に対応するため、軟口蓋化や咽頭化とうまく対応する。このような調音の差異を地域差とするかどうかはさらに研究を重ねる必要がある。以上の記述をまとめると、次のようになる。

1. 先行研究で「緊喉」とされるものは、調音音声学的に「軟口蓋化」「咽頭化」「そり舌化」のいずれかで実現される。
2. 1方言内では以上のいずれかの調音方法で一定して現れ、複数の音声実現が混在しない。
3. これら3種のうち、「軟口蓋化」が頻繁に見られる調音である一方、それを複数の先行研究が「r化」と呼ぶ。

### 3.2. ムニャ語：咽頭化・そり舌化・きしみ音化

孫宏開（1983）、黄布凡（1991）、池田（1998）、劉輝強（2008）などのムニャ語を扱う先行研究では「緊喉母音」が記述されてきたが、研究者ごとに「緊喉母音」を持つとされる語に異なりがあり、今なおその差異が生じる原因は明らかにされていない。ここでは、筆者の調査したムニャ語 Phungposhis（朋布西）方言の音声分析を通じて得られた母音組織を整理し、それと先行研究で扱われる Lugpa（六巴/貢嘎山）方言の具体的な語形式の対比から、「緊喉」が筆者の記述する何と対応するか明らかにする。

<sup>18</sup> また、黒澤（2009: 71）では、大研方言の音体系を議論するに当たって /ə/ を設定しているが、その音声学的な解説は「舌尖を巻き上げることよりは、中舌から奥舌にかけての部位を隆起させることによって作られる」とあり、これも楊煥典（1984: 133）や黒澤（2001）同様、一種の軟口蓋化の説明である。加えて、各方言内では「r化」という用語で記述される部分の音質にゆれがほとんどなく、軟口蓋化母音が現れる方言では一律軟口蓋化母音で実現されるといった具合であるから、軟口蓋化母音が記述される変種では、基本的に軟口蓋化母音以外の音声実現は見られないことになる。

<sup>19</sup> 中国の言語学論文における「r化」という用語が表す音価が「軟口蓋化」であるというのは慣例であるとはいえない。事実「r化」は舌尖の隆起を伴う音声現象に対して用いられる事例が多いと見られる。そのため、これらのナシ語の記述研究が軟口蓋化の表記に r を選択している理由は不明であるが、実際にそり舌で発音する方言もあるため、このような記述が生まれ、定着した可能性もあるだろう。

<sup>20</sup> Alexis Michaud（個人談話 2009）によれば、麗江壩方言に属するある村の発音では r 化母音で記述される音声は確かにそり舌化で実現されるという。Michaud（2006）の記述にも /ə/ が用いられている。

## 3.2.1. Phungposhis 方言の母音組織

Phungposhis 方言の非鼻母音の母音組織は、以下のように整理できる。

系列 I	i	e	a	ə	ɜ		u	ʊ	u	ø
系列 II	i <sup>ɿ</sup>	e <sup>ɿ</sup>	a <sup>ɿ</sup>	ɣ	ʌ	ɑ	o	ʊ <sup>ɿ</sup>		
系列 III										ø <sup>ɿ</sup>
系列 IV				ə		ɑ				

以上 4 系列に分類でき、それぞれ縦の軸に従って口腔内の調音位置に関連が認められる。4 系列に分類したのは、それぞれの調音音声学的特徴が複数からみあって実現するものも含まれるからである。これら 4 系列の基本的な調音音声学的特徴は次の通りである。

系列 I は口腔内での舌位置のみで実現される。

系列 II は口腔内での舌位置の形成とともに、舌根を咽頭に接近させればめを形成し、基本的には咽頭化音の特徴を示す母音を基調とする。これは対応する系列 I の音が存在する場合により明確に現れ、また特に<sup>ɿ</sup>を付加していない音は咽頭化の特徴が弱いもしくは舌根が奥よりにやや引かれる特徴をもつ。系列 I に対応する音のない /a, o/ は、音質的には系列 I に分類されるものであるが、初頭子音との配分関係<sup>21</sup>に注目すると、咽頭化母音と共通の出現環境になるため、系列 II に分類する。

系列 III は口腔内での舌位置の形成を基本としつつ、舌尖部が後部歯茎～前部硬口蓋に向かって若干持ち上がり、そり舌の音色をもつ。合わせて舌根が咽頭壁に向かってやや引かれることもある<sup>22</sup>。上表に記載していないが、漢語からの借用語の中には /ə/ も認められる。現段階では本来語の中には見出されない。

系列 IV は口腔内での舌位置の形成とともに、声帯を緊張させ軽いきしみ音を伴う。

以下に系列 I / 系列 II の対立の具体例を、可能な限り最小対になるよう掲げる。

<sup>21</sup> 系列 I, II, III の母音群は、基本的に軟口蓋音と口蓋垂音の間で次のような傾向を示す。

初頭子音	結びつく母音の傾向
軟口蓋音 k <sup>h</sup> , k, g, x, γ, ŋ	ɑ を除くすべての非咽頭化母音
口蓋垂音 q <sup>h</sup> , q, ɢ, ʁ, ʙ, ɳ	ɑ と o, すべての咽頭化母音, r 化母音

以上のうち、/o/ だけが両者の子音と結びつくことができる（そのためこれら子音両者の調音位置の対立が認められる）が、口蓋垂音と結びつく傾向が認められる。

<sup>22</sup> 黄布凡（1991: 101-102）のムニャ語の緊喉母音に関する音声学的な解説を見ると、ある種の条件異音として緊喉母音が若干そり舌の音価をもつことに触れていて、ムニャ語でもまたナシ語と同様に「緊喉」と呼ばれる要素と「r 化」と見られる要素が 1 つの音韻的特徴として共存しているといえる。



	系列 I の母音		系列 II の母音	
i/i <sup>ς</sup>	ˊmi	羊毛	ˊtee ˊɸɻ mi <sup>ς</sup>	少年
e/e <sup>ς</sup>	ˊle rə	梨	ˊle <sup>ς</sup> nɻ	月
a/a <sup>ς</sup>	ˊtsa	脈	ˊtsa <sup>ς</sup>	土
u/u <sup>ς</sup>	ˊts <sup>h</sup> u	ねずみ	ˊts <sup>h</sup> u <sup>ς</sup>	とげ
ə/ɣ	ˊmə	天/火	ˊmɻ mɻ	風
ʌ/Λ	ˊtsʌ	鹿	ˊtsΛ	脂肪油

次に、系列 I / 系列 IV の対立の具体例を掲げる。

	系列 I の母音		系列 IV の母音	
ə/ə̣	ˊtsə tsa	小さい	ˊtsə̣ lə	猫
ə/ə̣	ˊrə pa	手首	ˊrə̣	4
ɑ/ɑ̣	ˊteɑ pa	火箸	ˊteɑ̣	わな

「小さい」「猫」のペアでは、第1音節の発音がそれぞれ [ts<sup>1</sup>ə̣] と [tsə̣] となり、微細ではあるが明確に舌位置上の差が現れる。

### 3.2.2. Phungposhis 方言と Lugpa 方言の対比

上で提示した筆者の分析における Phungposhis 方言の母音組織は、先行研究とは異なる立場にある。筆者はまた、Phungposhis 方言以外に若干ではあるが Sabde (沙徳) 方言と Lugpa 方言の語彙調査を通じて、Phungposhis 方言と同様の音声学上の観察結果を得た。このことから、黄布凡 (1991) などのいう「緊喉/非緊喉」の異なりが Phungposhis 方言の何に対応するのか確かめる必要がある。以下に黄布凡 (主編) (1992) に含まれる Lugpa 方言における「緊喉母音」を含む例と筆者の記述する Phungposhis 方言の語彙形式の比較を示す<sup>23</sup>。

Lugpa 方言		語義	Phungposhis 方言	
音素	語形式		語形式	音素
e	le <sup>33</sup> nə̣ <sup>55</sup>	月	ˊle <sup>ς</sup> nɻ	e <sup>ς</sup>
a	sa <sup>53</sup>	血	ˊsa <sup>ς</sup>	a <sup>ς</sup>
ə̣	ts <sup>h</sup> ə̣ <sup>53</sup>	肺	ˊts <sup>h</sup> ɻ pa	ɻ
ə̣	rə̣ <sup>53</sup>	4	ˊrə̣	ə̣
ɸ	ɸə̣ <sup>24</sup>	漢族	ˊɸΛ	Λ
ə̣	qə̣ <sup>35</sup>	小麦	ˊqə̣	ə̣
uə̣	ts <sup>h</sup> uə̣ <sup>24</sup>	ねずみ	ˊts <sup>h</sup> u	u
uə̣	ɸuə̣ <sup>53</sup>	魚	ˊɸu <sup>ς</sup>	u <sup>ς</sup>

<sup>23</sup> 黄布凡 (主編) (1992) の記述においては、/a/ には下線が施されていないが、黄布凡 (1991: 101) の記述から「緊喉母音」であることが分かるため、以下の例に含める。

以上に示した方言間での語形式の比較からはっきり分かるように、Phungposhis方言の「系列 II, III, IV」のすべてがLugpa方言の「緊喉母音」とほぼ対応する。その中で、Lugpa方言の /ə/ に対して Phungposhis 方言ではそり舌化母音 /ɛ/ が対応するのは、黄布凡 (1991: 101) では「両唇音と口蓋垂音に続く緊喉母音は軽微なそり舌になる」という記述とも関連する可能性がある。ただし Phungposhis 方言では、そり舌性が初頭子音との配分関係によって現れるものではない<sup>24</sup>。また、Lugpa方言の /uə/ に対して Phungposhis 方言では非咽頭化母音 /u/ と咽頭化母音 /u<sup>h</sup>/ の両者の対応関係が見られる。

以上に示したような対応関係が明瞭に現れるのは、黄布凡 (1991)、黄布凡 (主編) (1992) で記述される Lugpa 方言の資料である。ただし Phungposhis 方言と Lugpa 方言の間の舌位置の対応が必ずしも一対一でないのは、方言差を反映しているかもしれない。

いずれにせよ、先行研究が「緊喉母音」の音声学的特徴について多くを述べていないため、記述の差異が生じる原因は特定できないが、筆者が実際に記述した Phungposhis 方言、Sabde 方言、Lugpa 方言の間で「緊喉母音」と呼ばれている要素に対応する音声実現に調音音声学的な差異があまり認められないことを考えると、先行研究で用いられている「緊喉」という用語で咽頭化を中心とする調音動作を表そうとした可能性があるだろう<sup>25</sup>。

#### 4. まとめと展望

本稿では、まず朱曉農 (2006: 18–20) で指摘された「緊喉母音」の音声学的な多義性について、TB 諸言語においても同様に多義に用いられていることを確認した。その上で、ナシ語及びムニャ語の音声記述を通して、同言語の先行研究が「緊喉」と呼んでいる現象に対応する調音音声学的特徴に「軟口蓋化」「そり舌化」「咽頭化」のいずれかが含まれることを記述し、これら3種もまた「緊喉」の多義性に含まれるべき調音方法であることを詳述した。また、これらの二次的調音が文献によって「r化」と呼ばれていることも判明した。

「緊喉」は音韻論的には確かに必要とされる名称である。たとえばジンポー語やロンウォー語などいくつかの言語では、その音声実現が多岐にわたるため、「緊喉」を音韻論における用語として、複数の音声現象を包含する1つの単位の呼称に用いるには適切性がある。とはいえ、厳密性を欠く表現が用語として用いられることに

<sup>24</sup> 加えてそり舌化母音 /ɛ/ をもつ例は少なく、体系の上では「系列 II」の母音による条件変異と見ることも可能である。しかし調音の方法を重視するため、そのようには分析していない。  
<sup>25</sup> 参考になる言及が Sun (2004: 272) にある。同論文によると、黄布凡がラヴルン語の現地調査において、同言語で Sun (2004) が軟口蓋化母音と呼ぶ現象について、自身の記述したムニャ語 (黄布凡 1991) における「緊喉母音」と聴覚印象が似ているとコメントしたとのことである。

この記述から推断するに、黄布凡 (1991) のいう「緊喉」が本稿で筆者が記述によるところの「咽頭化」に近い音声実現であった可能性がうかがえる。

よってTB諸言語の記述研究に支障をきたしていることは、ナシ語やムニャ語の先行研究を見れば明らかであるから、音声記述の面における用語の細分化とその再定義や、精密な音声分析に基づく的確な音声記述が早急に求められる。その一方で調音を一義的に表す音声記号の定義および作成もまた必要である。少なくとも、音声記述において、特に[ ]の中では、調音音声学的な定義を伴わないまま「緊喉」を意図する[ ]や「r化」を意図する[r]といった表記は行うべきでないと主張する。

## 参 照 文 献

- 艾傑瑞・艾思麟・李紹尼・吉米哈里森・拉瑪茲屋 (2000) 「論彝語、白語の音質と勾會圧肌帶的研究」『民族語文』6: 47-53.
- 戴慶廈 (1958) 「談談松緊元音」『少数民族語文論集』2: 35-48.
- 戴慶廈・李潔 (2007) 『勒期語研究』北京: 中央民族大學出版社.
- Dantsuji, Masatake (1982) An acoustic study on glottalized vowels in the Yi (Lolo) language—A preliminary report—. *Studia Phonologica* XVI: 1-11.
- 和即仁・姜竹儀 (1985) 『納西語簡誌』北京: 民族出版社.
- 黃布凡 (1991) 「木雅語」戴慶廈・黃布凡・傅愛蘭・仁增旺姆・劉菊黃 (編) 『藏緬語十五種』98-131. 北京: 北京燕山出版社.
- 黃布凡 (主編) (1992) 『藏緬語族語言詞匯』北京: 中央民族學院出版社.
- 池田巧 (1998) 「木雅語語音結構的幾個問題」『內陸アジア言語の研究』XIII: 83-91.
- Iwasa, Kazue (2003) *Axi and Azha—Descriptive, comparative, and sociolinguistic analyses of two Lolo dialects of China*, Doctoral dissertation, Kobe City University of Foreign Studies.
- Iwasa, Kazue (2006) *Deux types de la phonation des voyelles contractées en langue lolo—d’après une observation entre Axi et Liangshan lolo en Chine—*, ms.
- 龜井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 第6卷 術語編』東京: 三省堂.
- 黒澤直道 (2001) 「ナシ (納西) 語「緊喉母音論争」の意義—中甸県三壩郷白地方に見られる音声現象からの考察—」『アジア・アフリカ言語文化研究』61: 241-250.
- 黒澤直道 (2009) 「ナシ (納西) 語大研鎮方言の音韻体系—先行研究との比較を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』77: 63-81.
- 劉輝強 (2008) 「木雅語研究」袁曉文 (主編) 『雅砻江流域民族考察報告』620-656. 民族出版社 (原文は (1985) 『雅砻江上游民族考察報告』所収, 未見).
- 劉璐 (2009) 「景頗語簡誌」中国少数民族語言簡誌叢書編委會 (編) 『中国少数民族語言簡誌叢書修訂本 卷壹』117-191. 北京: 民族出版社.
- 馬學良 (1948) 「保文作祭獻樂供牲經譯注」『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』20: 577-666.
- Michaud, Alexis (2006) Three extreme cases of neutralisation : nasality, retroflexion and lip-rounding in Naxi. *Cahiers de Linguistique—Asie Orientale* 35(1): 23-55.
- 孫宏開 (1983) 「六江流域的民族語言及其系屬分類—兼述嘉陵江上游, 雅魯藏布江流域的民族語言」『民族學報』3: 163-179 (木雅語の部分).
- Sun, Jackson T.-S. (2004) Verb-stem variations in Showu rGyalrong. 林英津・徐芳敏・李存智・孫天心・楊秀芳・何大安 (編) 『漢藏語研究龔煌城先生七秩壽慶論文集』269-296. 台北: 中央研究院語言學研究所.
- 鈴木博之 (2005) 「チベット語松潘・九寨溝 [Sharkhog] 方言の超分節音素」『アジア・アフリカ文法研究』33: 1-37.
- 鈴木博之 (2007) 「チベット語包座 [Babzo] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』74: 101-120.
- 鈴木博之 (2008a) 「九寨溝風景区のチベット語とペマ語をめぐる若干の問題」『アジア言語論叢』7: 91-107.
- 鈴木博之 (2008b) 「ヒャルチベット語九寨溝・玉瓦 [gZhungwa] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』3: 135-168.

- Suzuki, Hiroyuki (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba: Phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31(1): 85–108.
- 徐琳・木玉璋・蓋興之(編著)(1986)『傈僳語簡誌』北京:民族出版社。
- 楊煥典(1984)「論納西語的音位系統」『アジア・アフリカ語の計数研究』22: 131–146.
- 楊煥典(1991)「從納西語的緊松元音對立看漢藏語系語音發展軌跡」『民族語文』1: 57–61.
- Yu, Defen (2007) *Aspects of Lisu phonology and grammar, a language of southeast Asia*. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.
- 朱文旭(2001)『彝語方言學』北京:中央民族大學出版社。
- 朱曉農(2003)『解開緊喉之謎』第三屆吳語國際學術研討會發表論文(未見)。
- 朱曉農(2006)「實驗音韻學和語言學語音學」『音韻研究』1–37. 北京:商務印書館。
- 朱曉農(2008a)『方法:語言學的靈魂』北京:北京大學出版社。
- 朱曉農(2008b)「非肺部氣流輔音」『東方語言學』三: 102–116.
- 朱曉農(2010)『語音學』北京:商務印書館。
- 朱曉農・周學文(2008)「嘎裂化:哈尼語緊元音」『民族語文』4: 9–18.

執筆者連絡先:

[受領日 2010年4月19日

Université de Provence -

最終原稿受理日 2011年5月2日]

CNRS Laboratoire Parole et Langage

5 avenue Pasteur,

13604 Aix-en-Provence

France

minibutasan@gmail.com

## Résumé

### Polysémie de la notion de *voyelle tendue* dans les langues tibéto-birmanes et cette réalité

HIROYUKI SUZUKI

*Université de Provence / CNRS / JSPS*

Plusieurs langues tibéto-birmanes possèdent un vocalisme incluant des voyelles avec une *gorge tendue* (緊喉: *kinkoo* en japonais et *jinhou* en chinois). Mais le terme *kinkoo* 緊喉 est polysémique et donc ambigu du point de vue de la phonétique articulatoire, ce qui génère certains problèmes pour la description phonétique. Cet article décrit certains aspects phonétiques du naxi et du minyag, et montre que les trois articulations secondaires correspondant à une 'vélarisation,' une 'retroflexion' et une 'pharyngalisation' doivent être incluses dans le signifié du terme *kinkoo* 緊喉. De plus, cet article fait ressortir que ces trois phénomènes phonétiques sont également décrits avec un autre terme 𑖀𑖄𑖅𑖆 (*aaruka* en japonais et *erhua* en chinois). Parmi les résultats de l'analyse proposée ici figure la nécessité d'une description utilisant des termes phonétiquement plus appropriés et plus précis.